
修士・博士：因果関係を推論する

小濱祥子

授業概要

「A（貧困など）がどのようにB（革命など）に影響したか？」「なぜBが起きたのか？」を考えることは、政治学の基礎である。ところが因果関係を観察することは不可能だから、我々はそれをできる限り厳密に推論することしかできない。したがって、研究者・実務家・ジャーナリストは、具体的なプロジェクトに取り組む前に因果推論の能力を身につけなくてはならない。そこで、この演習では「モノをきちんと論じる」ためのトレーニングを行い、論理一貫した議論と厳密な実証を行う能力を身につけることを目標とする。

この授業では、まず因果関係を知るための理想的なセッティング（ラボラトリーでの実験）を学び、そのようなセッティングが可能ではない事例（例えば過去の事象や紛争など）の分析、過程追跡等の手法へと議論を発展させる。受講生が実際の研究の中で使わないような手法もあるかもしれないが、あくまで頭のトレーニングの一環として考えて欲しい。また、授業では概念や方法論をめぐる漠然とした議論は行わない。課題文献も方法論を論じたようなものではなく、比較政治や国際政治の重要な研究を取り上げる。演習の第一の目的は方法論を学ぶことではなく、授業で学んだ様々な方法を手がかりに、研究を発展させることにあるということは強調しておきたい。

毎週のクラスでは報告者などは決めず、課題文献や関連する問題について全員でディスカッションを行う。実りあるディスカッションのためには、参加者が課題文献をきちんと予習し、事前に質問や意見を準備しておくことが必須である。また、2回のディスカッション・セッションでは、事前に配布した問題について各自がリサーチのデザインを考え、それを元により良いリサーチデザインを目指して議論を行う。これはあるトピックについて、論理整合的な仮説を構築し、その仮説を実証する上での潜在的な問題点を十分に認識した上で、最善の研究戦略を選択するための訓練である。また、受講生は自身の研究（修士・博士論文の一部）について研究デザインの提出およびプレゼンテーションを行う。これについては必ずしも実験などの手法を用いる必要はなく、授業で得た知見を活かして自身の研究を発展させることを目標とする。

授業の目標

1. 因果推論の基礎的な考え方について修得している。
2. 適切な因果推論を行うための手法を理解している。
3. 既存研究の因果関係に関する議論を批判的に論じることができる。
4. 因果推論の様々な手法を用いつつ自身の研究を発展させる。

成績評価

1. 出席：正当な理由なく3回欠席したものは不可とする。
2. ディスカッションへの参加（40%）：課題文献を読む際には、論文の細部ではなく（1）どのような問題に取り組んでいるか、（2）それにあってどのような困難があり、その解決のためにどのようなリサーチデザインを採用しているか、（3）どうすればその研究をより良いものにできるか、に留意すること。
3. リアクションペーパー（30%）：2度のディスカッション・セッションでは、事前に担当教員がリサーチクエッションを出題する。学生はA4一枚にそのクエッションをより良く探究するための研究デザインをまとめて授業の24時間前までにクラスのメンバーと共有する。
4. リサーチプロジェクトの報告&ペーパー（30%）：このクラスの最大の目的は学生自身の研究を発展させることである。自身の関心あるピックについてリサーチデザインを作成する。博士論文や修士論文の一部を取り上げてよい。
❖ 第一回提出期限：第5週（クラスにて提出）
A4一枚程度にリサーチトピック、既存の学説、暫定的な仮説をまとめる。

- ❖ 第二回提出期限：第 10 週（クラスにて提出）
A4 二枚以内で、リサーチストラテジーを説明する。
- ❖ 最後の授業でリサーチストラテジーについてプレゼンテーションを行う。
- ❖ 最終提出期限：TBA

オフィスアワー

授業に関する質問や研究に関する相談がある学生はオフィスアワーへの来訪を歓迎する。今学期のオフィスアワーは毎週〇曜〇時から〇時に（もしくはアポイントメントにて）、小浜研究室にて。

課題文献

下記の課題文献のうち、◆マークのあるものは別途配布する。その他のものは北大の電子ジャーナルから各自ダウンロードないし書籍を入手すること。

授業日程

Week 1 インTRODakション：因果関係とは何か

- 久米郁夫著『原因を推論する』（有斐閣、2013 年）第 1～3 章
- Gary King, Robert O. Keohane and Sidney Verba, 1994, Designing Social Inquiry (Princeton UP), Ch.3 ◆
(G.キング、R.O.コヘイン&S.ヴァーバ著、真淵勝監訳『社会科学のリサーチデザイン』（勁草書房、2004 年）第 3 章)

第 1 部：Causal Inference with Manipulation of the Treatment

Week 2 理想的なセッティング：ラボラトリーでの実験

- 清水和巳&河野勝編著『入門 政治経済学方法論』（東洋経済新報社、2008 年）第 3 章 ◆
- Shanto Iyengar, Mark D. Peters and Donald R. Kinder, 1982, "Experimental Demonstrations of the "Not-So-Minimal" Consequence of Television News Program," The American Political Science Review Vol.76, No.4: pp.848-858.

Week 3 フィールドでの実験

- Alan D. Gerber and Donald P. Green, 2000, The Effects of Canvassing, Telephone Calls, and Direct Mail on Voter Turnout: A Field Experiment, The American Political Science Review Vol.94, No.3: pp.653-663.

第 2 部：Causal Inference without Manipulation of the Treatment

Week 4 観察データ：単位、バイアス、ユニバース

- 久米郁夫著『原因を推論する』（有斐閣、2013 年）第 8 章
- Robert Pape, 2003, "The Strategic Logic of Suicide Terrorism," The American political Science Review, Vol.97, No.3: pp. 343-361

Week 5 Controlling Observables and Unobservables I

- 久米郁夫著『原因を推論する』（有斐閣、2013 年）第 5 章&第 7 章
- ブルース・ラセット著、鴨武彦訳『パクス・デモクラティア 冷戦後世界への原理』（東京大学出版会、1996 年）第 4 章 ◆

Week 6 Controlling observables and Unobservables II

- 久米郁夫著『原因を推論する』（有斐閣、2013年）第6章
- James D. Fearon, 2002, "Selection Effects and Deterrence," *International Interactions*, 28: pp. 5-29

Week 7 ディスカッション I

Week 8 マッチング

- Michael J. Gilligan and Ernest J. Sergenti, 2008, "Do UN Interventions Cause Peace? Using Matching to Improve Causal Inference," *Quarterly Journal of Political Science* Vol.3, No.2: pp.89-122.

Week 9 Instrumental Variable

- Daron Acemoglu, Simon Johnson, and James A. Robinson, 2001, "The Colonial Origins of Comparative Development: An Empirical Investigation," *American Economic Review* 91: pp. 1369-1401.

Week 10 「自然」実験

- Jason Lyall, 2009, "Does Indiscriminate Violence Incite Insurgent Attacks?," *Journal of Conflict Resolution*, Vol.53, No.3: pp.331-362.

Week 11 実験的要素をもった事例研究

- John Gerring and Rose McDermott, 2007, "An Experimental Template for Case Study Research," *American Journal of Political Science*, Vol.51, No.3: pp. 688-701
- Daniel N. Posner, 2004, "The Political Salience of Cultural Difference: Why Chewas and Tumbukas Are Allies in Zambia and Adversaries in Malawi," *American Political Science Review* Vol.98, No.4: pp. 529-545

Week 12 過程追跡と歴史叙述

- Stephen Van Evera, 1997, *Guide to Methods For Students of Political Science* (Cornell UP), Ch.2
- Jeffrey W. Legro, 2005, *Rethinking the World* (Cornell UP), Ch.2 and 3
- Marc Trachtenberg, 2006, *The Craft of International History* (Princeton UP), Ch.3 (Ch.4 if possible)

Week 13 ディスカッション II

第3部：Theory Building with Formal Modeling

Week 14 フォーマル・モデリング

- Susan C. Stokes, 2005, "Perverse Accountability: A Formal Model of Machine Politics with Evidence from Argentina," *American Political Science Review*, Vol.99, No.3: pp. 315-325

Week 15 プレゼンテーション